
『異能現象』

黒猫優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『異能現象』

【Nコード】

N1922BA

【作者名】

黒猫優

【あらすじ】

未知なる『異能現象』。

『悪魔』と『天使』の言葉。

主人公『三崎良和』とそれを取り巻く。

謎、現象、恐怖、不思議。

敵と味方の区別がつかない、この場で。

主人公は何を思い何をするのか？

学園異能恋愛モノの小説。

第一幕 始まりは憂鬱の始まり

「プロローグ」

「ただいま」

時間は5:00ちょうどだった。自分の部屋に直行する。親はリビングにも、台所にもいなかった。

「疲れたあー」

鞆を、机に投げる。ドスツ、音をたて、机に落下。

俺は自室のベッドに飛び込むように、倒れ落ちる。

「三日後は冬休みかあー、はあー」

休みには、多大な宿題がある。

そこだけは、嫌だった。面倒臭いからな

多分、冬休みの最終日に終わらせるだろう。

俺なら。ただ、それよりも嫌なことができた。

俺の名前は「三崎良和」（ミサキヨシカズ）高校二年生だ。好きな

ものはこれと違ってなく、

嫌いなものもこれと違ってない。普通で普通な一般高校生。

何故、今、疲れているか？それは、四日前に遡る話だ。

「1. 画期的な世界の始まり」

あと、一週間後は冬休み。

塾と宿題のコラボレーションした地獄の始まりがあと、一週間後と
いうことだ。

はあ、と机に上半身を倒して溜め息をついた俺だった。

「溜め息ついて、どうしたの？」

そんな俺に近づいてきたのは、友達の「園田晴樹」（ソノダハルキ）
だ。

「いや、冬休みの始まりで俺は地獄に突き落とされるんだなあー、

と」

「何があつたの、良和・・・」

なんか、可哀想な目を冷ややかにされたな、今。

「塾と宿題のコラボレーションは地獄だろう？」

「それは良和が宿題を溜め込むからでしょ」

そう言いながら、晴樹は俺の前の席の奴が不在のために、椅子に座り、両足は右に向け、上半身はこちらに向けて話してくる。

「そうは言っても、宿題はしたくない」

「それだから、終わんないんだよ、良和は」

嘆息気味に言う晴樹。今は一時間目の授業がおわり、二時間目に入るところだ。

キンコンカンコーン、と間の抜けたチャイムが鳴る。

「あ、二時間目が始まる。じゃね、良和」

「おうよ。晴樹」

と、晴樹は自分の席に戻る。

俺も寝る体勢から、通常の体勢に

戻すべく、上半身を上げる

「ああ、社会か」

ハゲの社会担当の先生を見て、科目を把握する。最初から覚えとけ、と言う意見は聞かない。

引き出しから、教科書・ノートを出しつつ、

授業始まりの代名詞『起立・気を付け・礼』をする。

着席とともに、脱力感がでる。このハゲ教師

授業前に、ニュースであった話を言うのは良いとして、自分の家の事情や学校のこと話すかな、友達みたいに、

しゃべり方がウザイが。

「おお、そうや、お前から知つとるか？昨日、また新しい異能現象が東区で起こつたらしいぞ、知らんかったろ？」

知つとるわ。ニュースであった。確か、第四の現象だったっけ。

「それで東区の一部が吹き飛んだそうだぞ」

ゴメン。それは知らなかった。

「あれはたまにある、風の異能現象だな。規模なら最大級だが残りはもちろん、聞いてなかったぜ。」

『異能現象』

通常の自然災害を超える現象。第一から第五の種類に分かれる。

第一は「異状」第二は「発生」第三は「憑依」第四は「自然」第五は「明晰」

五つの現象は違う反応を示す。例えば、第四

の現象なら自然災害を究極まで極めた現象が起こる。突風・落雷・津波・地震。様々だ。

「はあ、何を考えてんだか」

嘆息と同時に言葉を吐く。

『異能現象』は最低でも「通常に起こりうる自然現象が」強まったもの。ならば、人間でも、対抗できるのでそれまでの心配は要らない。

「何を熱く考えてんだ」

もう四時間目まで授業は終わり、昼休みだ。

弁当を机の横にかけてある鞆から取りだそうと、手を伸ばす。

「あれ？な、い？」

多分、この時間は購買部も混雑していて食い物など買える状態ではないだろう。

「今日の俺は飯なしかよ」

残念ながら、晴樹は生徒会の仕事でいない。

他クラスにまだ知り合いはいるが、多分笑って食い物をよこさない。

「はあー、しゃーねー」

仕方ない、と思い俺は食い物を諦めた。

ちよっと風に当たるか、と思い席を立つ。

ガタツ、と椅子は鈍い音を出した。

ただ、クラスの皆の声は生き生きしてた。

屋上にきた。風に当たるなら、一番の場所だ。幸い誰もいなかった。嘆息もでないまま、屋上のフェンスを背もたれにして寄りかかり、地べたに腰を下ろした。

風通しは良かった。風は俺に当たり、俺の髪を揺らす。

一切の無言だった。人はいないのだから、当たり前だが。

何となく、右を見る。右は中等部に属し、中学生がいる。だが、俺からは中等部の建物の屋上のフェンスしか見えない。中等部は高等部の真横にある。二つの建物を繋ぐように、通路が二つの建物の間にあるのだ。だが、使用されるのはあまりなく、文化祭などの物品を運ぶ時にしか使われない。

「はあ」

嘆息する。この頃のニュースでは『異能現象』の話ばかりだ。聞いてる方は疲れるのだ。

第二幕 開門した『死』 閉門した『生』

予感がした。そうとしか、言い様がなかった。俺は地べたに座った状態からさらに体を伏せるために上半身を右に地べたに叩きつける勢いでふった。鈍い音がしながらも、上半身は地べたにベッタリとついた。

その瞬間、ビュンツッ！という音がした。

さっきまで俺の頭の位置にあったところに『何か』が襲ってきた。

『何か』はそのまま、前方の屋上のドアまで進んでいく。

そして、『何か』はドアまで斬った。『何か』はそのまま、前方に進んでいった。

俺はとっさに音のした方向である後ろを向いた。刹那、驚愕した。

「う、嘘だろ！」

『何か』は生き物ではなかった。

正体は、台風。それも『強大な鎌鼬の台風』だった。

風が吹き溢れる通常の台風とは違い、鎌鼬が台風のように吹き溢れ螺旋状になっていた。

その『台風』とはかなり距離が離れていた。

数に、何キロメートル。

それほどの距離があるのに、あの鎌鼬は鉄製のドアを切り刻んだのだ。

その瞬間、頭のなかに出た言葉があった

『異能現象』

「何で？、い、今、あ、あ」

謎が頭に浮かんだ。異能現象は起きてるのに何で、『騒ぎが起きない』？

気づかないはおかしい。知らなかったはおかしい。最低でも、現象

を報せるために警報は鳴るはずだ。

だがとにかく、逃げないことには助かることはできない。
だが、ドアは破壊されている。

どうすれば？と、試行錯誤しているときに、
視界の端に何かを捉えた

ちよつと真横。右にいた。中等部の屋上。

人がいた。女の子だった。

「え、。」

だが、女の子はただの女の子ではなかった。

『翼』が生えていた。真っ赤な悪魔的な翼が。女の子の背中に生えていた。

「何だよ、あれ」

小さく呟いた。すると、この言葉に反応したのか、女の子がこちらを向いた。

驚愕の顔をした。目も見開いている。

「何かを言ったようだった。必死に伝えてくるが言葉が聞き取れない。
「どうしたの！」

「き、聞こえないよ！」

必死に伝えてくる。だが聞こえない。

その時、ドムツッ！という、大きな音がした。

音は台風から聞こえた。見てみると、

(ぼ、膨張してるッ！！)

というより、鎌鼬が螺旋状から乱れ、四方八方に飛び散ったのだ。

つまり、『こちらにも飛来してくる』

ヤバイッ！！、そう思った俺だったが。

百単位で来る鎌鼬は防ぎようも回避しようもなかった。

数百の鎌鼬が飛来してくる。

「あ、ああ、。あ」

完成された『死』が俺に向かってくる。

スローモーションで『死』の塊が見える。

(死、んだ、あ。あ)

次の瞬間、『死』の塊によって、俺の体は引き裂かれた。

目が覚めた。頭がボウとしている。

白い天井らしき物が見えた。

「こ、ここは？」

口から自然と声が出た。その時、

「気がついたか」

声が出た。はっ！と飛び起きる。

目の前には

「せ、先生……」

保健の先生の姿だった。

「何を驚いた表情で見ている」

「あ、いえ。 皆は？」

「授業中だ」

「授業中？」

大人な女性の先生『井熊冴子』（イクマサエコ）

怒れば鬼の先生だ。

「当たり前だ。お前は三時間目の授業中にぶっ倒れただろ？気を失って」

「え、三時間……目？」

俺はさつきまで、昼休みだったから、屋上に。わけが分からない

「まあ、取り敢えずは安静にしている」

「で、でも！」

「している」

きつめに言われた。

「は、はい」

鬼に言われたら黙るしかないよね？
それでも、『アレ』を夢とは思えなかった。

「2．もう始まったよ、絶望は」

一時間、保健で寝たら気分が全快した。

なので、五時間目から俺はまた、授業に入ることにした。
自分の教室に到着する。ドアを開ける。

「お、遅れました」

声音に若干の緊張が入ってしまう。

相手は国語の先生『信楽立麻』（シガラタツマ）

男の先生だ。怖くはない。ただ、何故かこの先生には緊張が走る。

「ああ、良和君ですか、体は大丈夫なので？」

「はい。気分は全快です」

「そうですか。今は古典の勉強です。席について、教科書の50ページを開きなさい」

「はい、ありがとうございます」

イケメンな所も苦手だ。

そうも言いつつ、俺は席に着く。

（あれは夢だったのかなあー）

頭のなかで、考えが蹂躪する。

グルグルと回ってもきた。考えがまとまらない。

（本当に、夢？）

結局、授業は頭に入らなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1922ba/>

『異能現象』

2012年1月6日04時51分発行